

ポイント



高齢化時代に対応した“商店街サービス”と生活防災の啓発で、住み続けてもらう街を目指す

東京都世田谷区と杉並区の山の手の住宅地を背景とする商店街。高齢化社会を見据えた商店街活動として、組合事務所を兼ねる街のお休み処「しもたかステーション」を中心にコンシェルジュと宅配やお荷物のお届けサービスを展開。また、今後危惧される首都圏直下型地震等への対応策として防災グッズの販売や講習会を開催するなど地域との連携で防災機能の向上を図り、地域住民に寄り添う住みやすい街づくりを目指している。

商店街情報

所在地:東京都世田谷区松原3丁目30-2
 商店街の類型:地域型商店街
 地域人口:153,593人 89,762世帯
 (北沢地域 2019年10月1日現在)
 組合員数:247名(令和元年9月現在)
 (主な業種構成:スーパー、飲食、サービス、医療関係、生鮮三品、食品、寝具、衣料品、ホビー、不動産など)
 電話:03-3322-5945 FAX:03-5300-3347
 URL: <http://www.shimotaka.or.jp/activity/station>



商店街の風景

商店街の概要と近年の環境変化

新宿から京王線の各駅停車で4駅、東急世田谷線との結節駅である下高井戸駅前の地域型商店街。街区のほぼ中程に区立松沢小学校が、また近くには松沢中学校、都立松原高校、日本大学櫻丘高等学校、日本大学文理学部などがあり、通行量も多く比較的恵まれた立地条件にある。

下高井戸は、甲州街道の一番目の宿場町「高井戸宿」が起源で、街道沿いには旅籠や茶屋などが軒を並べていた。下高井戸辺りは馬方の休憩所があったという。その後、大正2年の京王線の敷設による下高井戸駅の設置、さらに東急世田谷線の開業もあって甲州街道沿いから駅周辺の地に店舗が移って商店街を形成、昭和2年には任意組織が結成され商店街活動も始まった。戦後は、昭和23年に商店街組織の「商和会」が再結成され、街の活気が戻る中で、昭和47年に世田谷区内11番目の振興組合として現在の下高井戸商店街振興組合が設立された。

現在の商店街エリアは、東西に約700m、南北に約500mで5つの街区に分かれている。京王線の踏切を挟んで、北側には生鮮産品を中心に食料品を扱う店が集中し、地域住民の買い物や飲食店関係の食材として毎日利用される「食の豊かな街」。南側には飲食店、コンビニなどのチェーン店、携帯ショップ等があり、さらに商店街の先には日本大学文理学部をはじめ高校や小中学校がある「文教の街」。駅の東側には映画館(下高井戸シネマ)があり、「文化の街」と銘打っている。現在の組合員数は247名で、約300店舗が営業しており、スーパーが2店舗、飲食、物販、サービス、医療関係で構成されるが、飲食店と食品の取扱店が全体の37%を占めている。



東急世田谷線



お休み処「しもたかステーション」

商店街活動としては、①地域の公共的役割を担う「しもたかステーション」の運営、②100円で1枚差上げる「ありがとうスタンプ事業」、③環境整備として街路灯の設置・維持と防犯カメラの設置、植栽の整備、④安心・安全のための防犯パトロールや防災訓練等の事業を幅広く実施している。また、イベント活動には日大の学生の積極的な協力があり、内容の充実と盛り上がりを実現。さらに、平成13年から北海道の中川町とまちづくりの関係で交流が続いており、商店街内にサテライトショップがオープンするまでになっている。

助成事業の概要とその成果

当商店街は、地域住民の暮らしに寄り添う商店街として“ず〜っとしもたか”をコンセプトに、地域の安心安全、子育て支援、高齢者支援サービス等の充実を図ってきた。こうした中で平成23年に東日本大震災が発生し、帰宅困難者が多数に上った。当初、帰宅困難者は都立高校に誘導することになっていたが、誤って松沢小学校に誘導したため、子供たちの安全と帰宅困難者への対応が遅れた。このことに端を発し、商店街でも防災活動の重要性を改めて認識し、平成25年度の助成事業では「しもたか生活防災情報満載！店舗カタログ」の作成を行い、26年度事業では「生活防災セールと商店街の危機管理」をテーマに地域防災の強化に取り組んだ。

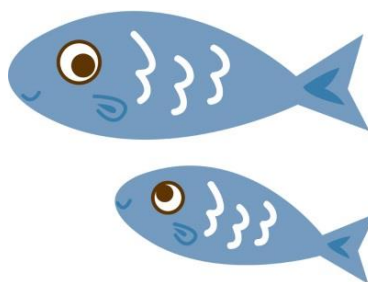
【平成25年度事業】

生活防災に関する情報を掲載した商店街カタログ(マップ)を12,000部作成し、地域の住民に配布したほか、「生活防災ワークショップ」を3回開催した。また、生活用品の防災グッズ化や防災行動の研究と「生活防災シール」を作成して配布した。さらに、地域の住民を対象に「大地震！日常生活で備える知恵」と題して生活防災フォーラムを開催したほか、防災等に関するアンケート調査を実施した。

【平成26年度事業】

前年度に引き続き、生活防災への取り組みを顧客に周知し、併せて販売促進につなげるため、以下の事業を実施した。

- ①「生活防災セール」として、商店街で販売している商品で防災グッズとなり得る物をリストアップし、どこで販売しているかの情報と非常時に役立つ情報を掲載した「生活防災ハンドブック」を6,000部作成し、住民に配布した。また、セール期間中(11月20日~12月5日)に防災グッズを購入された方には抽選券を配布して抽選会を実施した。
- ②「生活防災セミナー」として、危機管理アドバイザーを招き「目からうろこの防災対策」と題した講演と、街づくりコーディネーターから生活防災商品と防災グッズの発掘について説明を受けた。
- ③「商店街危機管理セミナー」として阪神淡路大震災で直接被害を受けた神戸市長田区の大正筋商店街の理事長を招いて、震災から商店街がどのように立ち直ったかのかについて講演をしてもらい、危機管理アドバイザーから世田谷区等における危機管理体制について説明意を受けた。



＜助成事業による成果等＞

今回の助成事業を通じて、当組合の生活防災への取り組みが地域に発信され、商店街のイメージアップと共に、地域住民や団体との防災まちづくりの連携がさらに強化された。生活防災ハンドブックのデザインにインパクトがあり、内容も大変役に立つと好評だった。

「安さ」や「品揃えの豊富さ」では大型店に太刀打ちできないが、今回の事業を通じて、組合員はもちろん、地域の住民にも、「地域住民から信頼して貰う事で、何回も来街して頂く」という商店街のコンセプトが浸透したと感じている。

今回の事業終了後、会員から生活防災フェアについて、防災の日や震災があった日付の前後に実施してはどうか。物販を主としないサービス業等の業種からは、サービス分野での防災対応が出来るのか等検討して欲しい等の意見が出て、生活防災について組合員内での意識が高まった。

助成事業以降の商店街活動

当商店街では、“東京にも地震は来る！その時商店街では何ができるか”という問題意識を持って、助成事業終了後も地域防災に取り組んでいる。特に、商店街には防災に必要なグッズが山ほどある、という気付きを踏まえ、啓発のための情報発信を行うとともに、地域・行政との連携による防災体制づくりに取り組んでいる。また、“災害時に如何に店を続けるか”というBCPなどの危機管理について検討を行っている。さらに、地域とお客様へのサービスとして「しもたかステーション」の活動を積極的に推進している。

①地域防災活動の推進

毎年春に開催する「しもたか大さくら祭り」において、世田谷消防署の協力を得て防災コーナーを設け、消防車と呼んでの水消火訓練、起震車による地震体験、消防士との記念撮影等を実施している。また、8月末に開催する商店街主催の「しもたかサマーフェスティバル」においても消防署の協力による消火訓練等を実施している。さらに、都立松原高校校定時制での「生活防災講演会」への参加、松沢・松原まちづくりセンターでの「防災塾」への参加、「まちあるきワークショップ」における避難場所や避難経路の確認など地域団体等との連携による防災活動を推進するとともに、地域住民に生活防災のためのローリングストック等について認識を持ってもらうよう努めている。



しもたか大さくら祭りの様子(商店街HPより)

②しもたかステーションによる地域住民へのサービス

当商店街では、地域住民に対するアンケート調査をもとに、お休み処(トイレ、休憩いす、飲水、ベビーベッド等)と街コンシェルジュ(ご案内所)を兼ねた商店街の駅ともいえる「しもたかステーション」を設置。来街者の便を図るほか、AEDの設置や荷物の預かりと荷物の配達等のお買い物サポートを実施し、高齢化社会に対応したサービスを展開している。

③北海道中川町との地域連携

当商店街と北海道中川郡の中川町とは平成13年からまちづくりについて交流を重ねており、毎年「しもたか大さくら祭り」などにも参加して貰っている。組合の役員や地域の人々が中川町を訪問するほか、中川町の物産の販売なども手掛け、平成28年には「サテライトショップ「ナカガワのナカガワ」がオープン。さらに、災害時には相互に支援する協定を締結するなど、地域間交流の効果を上げている。



自治体による活性化支援等

下高井戸

世田谷区は、東京23区の中でも2番目に広い面積を有し、人口も95万人を数える。都心への利便性も高く、優良な住宅地とおしゃれな買い物スポットのイメージがあり、住みたいと思う人も多い。現在世田谷区には130の商店街があるが、5年前には138を数えていた。5年間で8商店街がなくなっており、住宅地を背景に多くの人口を抱えていても商店街と中小商業者の環境は依然として厳しいものがある。特に、駅から距離があるなど立地条件が厳しい場合はなおさらの状況にあるといえる。

一方、商店街によってはステージの作り方やワゴンでの販売などイベントの運営方法を工夫することで個店の売り上げに結びつけているケースもあり、従来型の盆踊りや駅前イベントだけではなく集客方法等について知恵を絞って貰いたいと考えている。下高井戸商店街振興組合は、積極的な事業活動で地域防災への取り組みで効果を上げているほか、京王線沿線の「各駅バル」などにも取り組んで貰っている。

世田谷区ではこうした商店街活動を支援するため、「商店街イベント支援事業」として、商店街が主催する地域活性化イベント、青年部・女性部による新規イベント、社会貢献等を主な目的とするイベント等に対して必要経費の一部を助成しており、昨年度は130件ほどの利用があった。また「活力ある商店街育成事業」として、商店街が設置する共同施設やコミュニティ施設の整備等の事業に対して助成を実施しているほか、「商店街振興組合への支援事業」として、商店街振興組合の運営について支援を行うほか、安心・安全の街づくりや消費者懇談会等の事業について支援を行っている。

商店街の今後の戦略

～安心して住める食の豊かな街～

当商店街では「ずーっとしもたか」をコンセプトに、地域住民の暮らしに寄り添う商店街として、安心・安全、子育て支援、高齢者支援等に力を入れてきた。「しもたかステーション」も地域のお休み処としてよく利用されている。また、助成事業で取り組んだ生活防災商品の提示・販売など生活防災の啓発運動を継続していることで地域の人々からの信頼も高まっており、今後も「生活防災フェア」など行政とも連携して積極的に取り組んでいきたい。

一方、商店街と地域にとっての喫緊の課題として、令和4年に予定されている京王線と下高井戸駅の高架化があり、完成すると人の流れが変わるなど街が大きく変わろうとしている。商店街ではまちづくり協議会とともに、ワークショップなどで地域の人々にも参加して貰い、今後の街づくりについて意見交換を行っているが、良い店が姿を消しつつある中で、古いものと新しいものをどうマッチさせていくかが課題である。今後も“食の豊かな楽しみのある商店街”を維持していきたい。

また、長年の商店街活動で培われてきた「地域住民から信頼して貰い、何回も来店して貰う」というコンセプトに、今後想定される首都圏直下型地震などに備えて防災の観点を織り込んで新しい街を作り出すための勉強会なども進めていきたい。



～ 仕掛け人 ～ 下高井戸商店街振興組合
左 事務局長 石井健夫
右 理事長 旦尾 衛

取材を通じて明らかになったこと

山の手と呼ばれる世田谷・杉並にあって、人の繋がりを感じられる商店街は、古くは宿場町であったという長い歴史に加え、環境変化と地域の動向を見据えた組合役員の積極的な取り組みに負うところが大きい。特に、地域における防災活動では日頃からの備えが重要であり、このため商店街が果たす役割は非常に大きなものがある。また、高齢化社会の中で「しもたかステーション」の活動は文字通り“地域に寄り添う”活動といえる。北海道の中川町との交流も経済と文化の両面で成果を上げつつある。当商店街では、理事の半数が50才以下で行動力がありこうした新たな取り組みに熱心で、組合事務局もこれに積極的に応えており、地域活性化に貢献する組合事業として参考とすべき点が多いといえる。

